Akita University

幼稚園と家庭との連携
—園行事の実施と幼稚園教育の役割—†

奥山　順子*
秋田大学教育学部附属幼稚園

現在の幼稚園教育においては幼児を取り巻く環境の変化に対応して，幼稚園教育の役割を見なおしていくことが求められている．家庭や地域社会における幼児の生活の変化，保護者の養育姿勢の変化をとらえた保育の実践が必要とされるが，その上では，幼稚園と家庭との連携は重要な課題の一つである．本論は幼稚園と家庭との連携の在り方を，園行事の実践を通して考察したものである．

保護者参加の行事が，保護者の育児に対する意識を啓発する場，保護者自身が育児を学ぶ場，保護者が育児の楽しさを感じ取ることのできる場としての意義があることを確認した．

キーワード：幼稚園　家庭との連携　行事

I　はじめに

『幼稚園教育要領』(1989) では，幼児期が，生涯にわたる人間形成の基礎を培う時期であるとし，幼稚園教育は「環境を通して行なうことを基本とする」こと，「教師は幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」ことを幼稚園教育の基本としている．また，そのために重視する事項として，①幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること，②遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすること，③幼児一人一人の特性に応じ発達に即した指導を行なうようにすること，の3点を挙げている．この『幼稚園教育要領』の改訂にあたっては，幼児を取り巻く環境等の変化に伴い子供の発達の状況が変化してきていること，それまでの幼稚園教育の中に幼児の発達や心身の調和のとれた人間形成の基礎を培う教育にはそぐわない方法・内容が一部に取り入れられていることが指摘されていた．すなわち，発達の実態を考慮せずに画一的な方法での指導が行なわれたり，教師が共通の経験や活動を配列し，時には特定の知識や技能の習得をめざしたりするなどの保育が見られたことである．

幼稚園現場においては，この『幼稚園教育要領』施行以来，園の実情によって取り組みの方向は多様ではあるものの，幼児自らが環境に働きかけ，作り出していく遊びを軸として保育に取り組もうとしている．しかし，幼児主体の遊びの重要性や，環境に視点をおいた保育の考察の重要性は，理念として理解されてはいても，「環境による教育」「幼児の主体的な生活」といった視点で実際の幼児の生活する姿や保育者の具体的な指導を振り返り，幼児の発達にとっての意味を具体的にとらえることができずにいる保育者（教師）も見られる．

『幼稚園教育指導書』(1989) では，環境は「園具や遊具，素材などの物的環境や，幼児や教師などの人的環境を含んでいることは言うまでもないが，さらに幼児が接する自然や社会の事象，また人や物が相互に関連しあってかもし出す雰囲気，時間，空間など幼児を取り巻くすべてを指している」とし，「環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して，望ましい方向に向かって幼

1997年1月20日受理

† The Importance of Close Cooperation between Teachers and Families for Early Childhood Education
— A Remark on the Participation of Family Members in Kindergarten Events —

* Junko OKUYAMA, Attached Kindergarten of Akita University, Akita

Akita University

児の発達を促すようにすること」が「環境による教育」である，としている．従来の保育では，保育者の直接的な指導や援助，あるいは遊具や素材などの選択や提供の仕方が保育者の援助の中心として考えられていた傾向があり，この『幼稚園教育要領』の環境のとらえ方は保育者が具体的な援助の方向を見い出す上での戸惑いにつながったとも言うことができるのではなかろうか．また，幼稚園教育要領に関する調査協力者会議の答申「幼稚園教育の在り方について」(1989) では，「同年齢の幼児を一定の到達度に向けて同一の方法で指導しようとする傾向」を指摘している．幼児の発達の特性に応じた保育者の創意工夫ある実践が求められているが，逆に必要な援助や指導に対しても保育者を消極的にさせ，具体的な保育や願う幼児像をイメージすることが難しいという保育者の戸惑いにもつながっていると思われる．青木 (1990) は，幼児を中心に置いた保育をしようとする意識で，単に幼児の自由な遊びを「見回り」するだけの保育の問題を指摘し，そうした保育者の特徴として，「①保育者に保育のビジョンがなく幼児に何らかの働きかけを行うことを罪悪だと思っている，②幼児の発達についての理解が不十分で何を求めているのかがつかめず対応がずれていく，③保育者自身遊びの経験が少なく幼児の遊びの何がおもしろいのかつかめない」の三点を挙げている．これは一部の保育を対象としての批判であろうが，『幼稚園教育要領』改訂以来，筆者がかかわった複数の保育現場で報告された保育実践上の課題とも一致するものである．このような実情から，保育者が幼稚園においての幼児主体の遊びの意味を発達の視点からとらえて指導や援助の在り方をさぐっていくことは，現在の保育の重要な課題であると言うことができよう．そのためには，幼稚園における遊びの中での幼児の姿をとらえるとともに，家庭や地域社会での幼児の経験も視野に入れていくことが必要であると考える．

また一方では，幼児の遊びに関しては積極的な保育の見直しがなされているが，幼稚園生活全体では様々な制約や長年の慣習から従来の保育の形態や内容を変えることができず，再検討を迫られる実践も多く見られる．特に，いわゆる「目玉保育」といわれる保育に象徴される特定の知識や技能の習得をめざす保育や特定の行事などにおいては，家庭や地域の求める保育と保育者の求める保育とに大きな開きがある場合も認められる．一部には，近年の少子化傾向の中での園経営にも関連して特定の活動や行事が園の対外的なＰＲの手段とされるなど，幼児の側から保育が計画されているとは言い難い例も見られる．

近年の幼児を取り巻く環境の変化に対応して保育を実践していくためには，単に幼児の幼稚園内での生活だけをとらえて保育を考えていくのではなく，家庭や地域での生活をも含めた幼児の生活全体をとらえていかなくてはならない．家庭や地域社会での幼児の体験を考慮した保育の計画や，幼児の自然な生活の流れをとらえた保育の計画が必要である．保護者の養育姿勢の変化，幼稚園教育に対する期待の変化も考慮し，幼児の発達にとっての幼稚園生活の意味をとらえると共に，家庭や地域との関係の中で幼稚園教育の目的を見なおしていくことが必要であろう．

以上のような現在の幼稚園教育の実情をふまえ，幼稚園を「幼児期にふさわしい生活」の場とするためには，幼稚園と家庭との連携の在り方が保育実践上の重要な課題としてとらえられよう．したがって小論では，幼稚園と家庭との連携の在り方を秋田大学教育学部附属幼稚園（以下附属幼稚園という）の園行事の実践を通して考察していきたい．なぜなら，それは，現代の社会における幼稚園教育の目的やその役割の考察につながるものであると考えられるからである．

ところで，現代の幼児を取り巻く環境の変化と，その幼児の発達に対する影響はすでに多くの場で指摘されていることである．「幼稚園教育の在り方について」では，「経済の高度成長とそれに伴う産業構造の変化，都市化，情報化，高学歴化，高齢化社会化，女性の社会参加の機会の拡大及び生活様式や生活意識の変化，価値観の多様化等，その変化の局面は広汎に及んでいる」とし，幼児にとっての直接の環境である家庭や地域社会への影響として「いわゆる核家族化による高齢者との触れ合いの機会の減少や少子化による兄弟姉妹の減少，就労形態の変化，家事の電化，就労している母親の増加，育児情報の氾濫，テレビや電子玩具の普及等は地域における異年齢を含む子供集団の減少や遊び場の不足等とあいまって，自然との触れ合いをはじめとする幼児の直接体験の機会の減少をもたらし，結果として人間関係の希薄化を中心に，家庭及び地域社会の教育力の

Akita University

低下を招いている」としている．また，しつけをはじめとする幼児期の教育のすべてを幼稚園に期待する風潮や，幼児に対する保護者の期待の過熱化とそれによる幼稚園経営の困難をも指摘している．その上で幼児が本来の生活と体験を得る場としての幼稚園教育の重要性が増大していると述べている．

ここで指摘されている傾向は，地域や園によって多少の相違があると思われるが，筆者の実践の中でも幼児の特徴や家庭の実態として認められることである．こうした現在の幼児の実情をふまえて幼稚園と家庭とが連携して，幼児の発達を保障する環境を作っていくことが重要であることは言うまでもなく，幼稚園と家庭との連携の在り方を探っていくことは，幼稚園における保育実践上の重要な課題である，ということができよう．

上記の幼児を取り巻く課題をふまえて，下記の面から幼児や家庭の実情をとらえ，幼稚園と家庭との連携の方向を考察していきたい．

① 家庭や地域での環境の変化
② 家庭での生活の変化
③ 親子のかかわりの変化
④ 親（保護者）の期待の変化

Ⅱ 幼稚園と家庭との連携の方向

① 家庭や地域での幼児の環境の変化

近隣に子供が少なく，幼稚園入園前に同年代の友達と自由に遊ぶ経験のない幼児が少なくない．また，入園後の生活でも，幼稚園だけが同年代の友達と遊ぶことのできる場であるという幼児も多い．

また，家庭の周辺に幼児が自由に遊ぶことのできる安全な遊び場がない幼児も多い．一方，地域における人間関係が希薄化し，近年の「公園デビュー」ということばに象徴されるように，保護者自身が地域での人間関係を作ることができず，幼児の生活圏を自然に広げていくことができない場合もある．それとあいまって，ファミコン，キッズコンピューターなどの電子玩具で一人で遊ぶ時間の多い幼児や，降園後の友達とのかかわりを習い事や幼児教室等の場に求める保護者もいる．こうした幼児の生活環境の変化を考慮し，幼児の発達過程で幼稚園が果たす役割を，実際の幼児の生活全体をとらえて見直していく必要があるだろう．

② 家庭での生活の変化

家庭の生活様式の変化により，家庭の中で子供が手伝いをする場面は減少している．着替えなどの生活技能が身についていても，自分で状況を感じとって判断したり，自分から取り組んだりすることができずにいる幼児もいる．幼児が，自分自身の役割を意識して行動したり自分から取り組んでいったりする喜びや，自分が家族や仲間集団から必要とされていることを感じ取りながら行動する喜びを味わったりすることができる場を保障していくことが必要であろう．

③ 親子のかかわりの変化

家庭内で親子で過ごす時間の中で，一緒に遊ぶ体験は十分とは言えないと思われる．保護者自身が幼少時に多様な遊びを体験したことのない世代になっており，子供と一緒にどんな遊びをしていいのかわからない，といった声もきかれる．服部，原田の調査（1991）では，3歳児に対する母親の話かけや一緒に遊ぶ時間は1歳時からほとんど変化していないということが報告されている．幼児が豊富な玩具にかかわることだけを幼児にとっての遊びととらえたり，家庭での幼児との過ごし方がわからず幼児教室などに依存する保護者が増加している．また，車での外出が親子での休日のもっとも多い過ごし方であるという家庭など，家族との安定したかかわりの中で遊びの幅を広げていくといった経験は少ないように思われる．

他方，子供を一人の人間として尊重しようとする意識をもって，対等にかかわろうとする保護者も見られる．幼児も独立した人格であるということを認めようとする姿勢は望ましいものであろうが，幼児が安定した気持ちで行動することができるようになるためには，保護者に対して安心して依存できる関係が不可欠であるということが見落とされているのではなかろうか．

一方では，子供の幼稚園入園によって，自分自身に友人ができたことを喜ぶ保護者が多く見られる．筆者が3年保育児の保護者を対象にして行ったアンケート調査（1992）では，「子供を入園させてお母さんにとってよかったと思うこと」の問いに「母親に友人ができたこと」を挙げた保護者が半数を超え，「子供の成長」と回答した保護者を上回っていた．幼稚園は保護者にとって，保育者とのかかわりを通して親子での楽しい経験のできる場やあるいは保護者同士のかかわりの中で育児を体験的に学んでいくことのできる場としての役割を果たすのではないだ

Akita University

入園させて子供にとってよかったことは？	%
・遊びを作り出せるようになった。	25.0
・自分で何でもやろうとするようになった。	27.5
・友だちができた。	52.5
・周囲の人のことを考えられるようになった。	32.5
・基本的生活習慣が身についた。	22.5

子供を入園させて、お母さんにとってよかったことは？	%
・友達ができ、親同士のかかわりができた。	52.5
・先生とのかかわりを通して子育てについて考えることができ、自信を持って子供にかかわることができるようになった。	20.0
・わが子を客観的に見ることができるようになった。	10.0
・登降園時に子供とじっくりかかわることができた。	7.5
・育児の精神的担が軽減された。	7.5
・子供が成長した。	27.5

3年保育児保護者へのアンケート　1992　秋田大学教育学部附属幼稚園
調査対象数　60名

図1

ろうか.

④　保護者の期待の変化

①～③の実態からも，保護者の幼稚園教育に対する期待は変化している，ということができる.

本来家庭で行われるべき基本的生活習慣の確立や，知識や技能の習得を幼稚園に求めるなど，幼稚園教育の本来の目的とは違った期待を抱く保護者もいる.一方では，多くの保護者が幼稚園生活に対して「子供らしくのびのびとした遊び」や「友達との自由な遊び」を期待しているが，その意味を真に理解することができず，実際の幼稚園生活に対しては不安を抱く場合も少なくない．幼児が実際に展開する遊びにその意味を認めることができなかったり，理念としては幼児の自由な遊びの大切さを理解していても，実際のかかわりでは「きちんとできること」や「みんなと一緒にできること」を求めていたりする例も見られる.

親の期待が子供の発達に大きな影響を与えることは多くの場で指摘されていることである．そして，その期待が幼児の成長の基盤となる環境を作っているともいうことができる．柏木（1988）によると，日本の母親の抱く子供に対する期待は「自己主張・実現面」より「自己抑制面」が強く，3歳から7歳までの子供では一貫して自己抑制面が強い，としている．こうした傾向は実際の保護者の幼児へのかかわりや保育者への要求からもうかがわれるものである．保護者に対して幼児の遊びの意味，幼稚園教育のめざす「幼児期にふさわしい生活」の意味を伝えていくことも現在の幼稚園教育の果たすべき重要な役割であると言えよう.

Ⅲ　実践の方向

附属幼稚園では以上のように幼児と保護者の実情とその課題をとらえ，実践における幼稚園と家庭との連携のための実践の方向を次の4点に整理した.まず第一に，幼児の家庭における生活体験の変化をとらえ，幼児の発達に必要な経験が実現するための幼稚園の役割を考えて実践を計画していく．第二に，幼児期の発達の特性をふまえ，幼児が主体的に環境に働きかけ，友達や保育者とのかかわりの中で自ら遊び（活動）をつくり出す喜びを味わうことのできる時間や場を保障していく．第三に，保護者が他の保護者や保育者とのかかわりの中で子育ての楽しさを感じとったり，具体的な子供へのかかわり方を学んだりすることができるような場作りや関係づくりをする．そして最後に，幼児期の発達に必要な経験や，幼児の遊びの楽しさやその意義について保護者がより理解できるよう，体験の場や啓発の機会を作っていく.

以上の四点にわたる実践の方向は，幼稚園の保育を実践するにあたって，園行事を通しての意図的な場の設定がきわめて有効な役割を発揮すると期待できよう．なぜなら，幼稚園と家庭との連携は，日常的な保護者と保育者との様々なかかわりの積み重ねの中でそのねらいが達成されるものであるが，園行事を通しての意図的な場の設定は，保護者集団の関係づくりの場や幼児・保護者の共通体験の場，保護者の幼児の生活の体験的な理解の場，保護者自身が活動を楽しむことのできる場を提供することができると思われるからである．以下，幼稚園における実際の園行事を通して家庭との連携の在り方を考察していきたい.

Ⅳ　園行事実施における課題

幼稚園では年間の保育計画の中に様々な行事が計画されている．幼稚園において多くの行事が保育の中に取り入れられているのは，昭和23年，学校教育法制定の後に幼稚園，保育所の両者を対象として文部省が刊行した『保育要項～幼児教育の手引き』で「楽しい幼児の経験」として示された保育内容の中に「年中行事」が明示され，「幼児の情操を養い，

Akita University

保育に変化と潤いをあたえ，郷土的な気分を作ってやる上から，年中行事はできるだけ保育に取り入れることが必要である」と示されていたことに端を発しているといわれる．以来，幼稚園教育の中では，季節ごとの伝承行事，入園式などの儀式的な行事，運動会など学校行事の中で取り上げられていたものを踏襲した行事，安全や健康のために必要な行事など様々な行事が実施されてきた．しかし，多くの行事が次々に実施され，行事の実施だけで保育時間のほとんどが費やされたり，慣習によってそれまで実施されてきた行事を踏襲してしまうために行事の実施自体が保育の目的になってしまったりする等行事に関しては課題も多く，現在の幼稚園教育においても同様の課題が指摘されている．

行事は本来，幼児の生活の節目となり，それまでの生活経験をもとに幼児と保育者とが共に活動を作り上げる喜びや期待感，日常の活動とは異なる活動の工夫などを経験したり，季節感や伝承文化など，行事でなくてはできない体験をしたりすることができる機会である．行事自体は非日常の活動であるが，行事での経験は前後の生活の流れの中に位置付けられ，成長の節目となるように計画されるべきものであろう．幼児の成長，発達という視点での行事の見直しは，現在の幼稚園教育の一つの課題として挙げられる．

一方，園行事には保育参観や運動会など保護者参加の機会も多い．こうした保護者参加の行事では，従来保護者は参観者の立場で参加することが多かった．この場合，保護者の関心が目に見えた活動の出来栄えに向けられる傾向があった．そこでは幼児の整然とした活動や熟達した活動の側面が評価されたり，逆に幼児が単に愛らしく，かわいらしい対象としてのみとらえられたりすることもあった．

園行事の実施が，幼児にとって生活を豊かなものとし，発達に必要な体験が実現する機会となるようにするとともに，前項で述べた家庭との連携においても意義のある機会となることを行事の実践を通して考察していきたい．

V　実践と考察

附属幼稚園では，これまでも幼稚園と家庭との連携における園行事の意義を考え，保護者の行事への参加の在り方を追究し，実践してきた．その中で，保護者が幼児や保育者と共に活動することを通して，幼稚園教育へのより一層の理解を図ると共に，楽しさの共有が子育ての楽しさや幼児期の遊びへの共感につながることをねらいとしていた．しかし，そうした目的で見直し計画された行事も，実践を重ねるうちに保育者の中に，見直された行事の内容や形態を踏襲するだけで安心してしまうなど，本来の目的を考えずに実施してしまう傾向も見られるようになった．そのため，行事の目的を，実際の行事の中での幼児や保護者の姿を通して具体的に考察していくことが，保育実践上の課題として浮かび上がってきた．ここでは，平成7年度，8年度実施の行事における幼児や保護者の活動から，Ⅲで述べた幼稚園と家庭との連携の方向について考察していきたい．

1.　カレーづくり（3歳児8月）

(1)　行事の計画

5歳児を中心に園庭で栽培した野菜を使ってカレーを作り，みんなで食べる．各年齢がそれぞれに分担して材料を切るなどの準備をし，保護者の有志に手伝ってもらい，園庭でカレーを煮る．

収穫の喜びを味わうと共に，各年齢の幼児がそれぞれに調理に参加し，自分たちで作る喜びや友達と一緒に食べる楽しさを味わうことをねらいとする．

(2)　幼児の活動

3歳児・たまねぎの皮むきをする．
　　・きのこを手で裂く．
4歳児・なすを切る．
　　・トマトをスプーンでつぶす．
5歳児・ジャガ芋と人参の皮をむき，切る．

(3)　活動の実際と家庭との連携についての考察

＜家庭での生活への広がり＞

3歳児は，本物の料理に自分が参加できることを喜び，期待をもって参加していた．また，自分たちが準備したたまねぎやきのこを4，5歳児に食べてもらえる，ということは，日頃幼稚園では4，5歳児に世話をしてもらうことの多い3歳児が，年長児とのかかわりの中で自分自身の役割を自覚できたということで，大きな喜びを感じたようである．

たまねぎの皮むきは，散らかることを気にせずにできるよう，床に敷いた新聞紙の上で行った．ほとんどの幼児はこうした手伝いを家庭ではしたことがなかった．当日参加して幼児の様子を見守っていた保護者からは，これなら家庭でもできそうだ，との声が聞かれた．幼稚園での活動が保護者が幼児の力

Akita University

平成８年度実施予定の保護者参加の行事一覧

	行　　事	日	曜	参加形態	人数	備　　考
４月	グループ懇談	20～26		自由に参観 少人数で懇談 （懇談以外のＰが懇談中の幼児の世話）	全員	４，５歳児のみ
	＊５月人形飾り付け	20	土			５歳児のみ
５月	＊５月人形片付け	16	木		〃	〃
	遠足（大森山）	14	火	参加	全員	
	保育自由参観	17～20		自由に参観	全員	
	グループ懇談	21～23		少人数で懇談 （懇談以外のＰが懇談中の幼児の世話）		３歳児のみ
	家族参観日	25	土	父親を中心に保育参観	全員	
７月	保育参観　学級懇談	12	金	学級ごとに参観懇談	全員	３，４歳児
	保育参観　学級懇談	15	月	〃 （司会はＰ）	全員	５歳児
９月	カレーづくり	3	火	幼児の活動を援助	６名	
	運動会			準備手伝い	全員	
		22	日	参加	全員	
				会場設定等の援助	役員	
10月	いもほり遠足	23	水	参加	全員	（雨天時17日）
11月	ふようのつどい			コーナー遊びの企画	役員	
				コーラスへの参加	有志	
		15	金	作業	全員	清掃、会場設定
		16	土	参加	全員	
	保育参観　学級懇談	30	土	学級ごとに参観懇談 （司会はＰ）	全員	３，５歳児
12月	保育参観　学級懇談	2	月	〃	全員	４歳児
	もちつき	10	火	幼児の活動を援助		
	交通安全教室	13	金	参加	全員	
１月	そりすべり	22	水	お手伝い	10名	
		23	木	～幼児の活動を援助		
		28	火			
		30	水			
２月	雛人形飾り付け	4	火	作業	３人	４歳児のみ
	保育参観　学級懇談	15	土	学級ごとに参観懇談 （司会はＰ）	全員	３，４歳児
	保育参観　学級懇談	17	月	〃	全員	５歳児
３月	雛人形片付け	1	土	作業	３人	４歳児のみ 飾り付けと同じメンバー
	清掃奉仕	3	月	手伝い	全員	
	卒園式			会場づくり手伝い プレゼント作り作業		
		12	水	参加（式に参列）	全員	５歳児のみ
				参加（門出の見送り	全員	３，４歳児
毎月	鳩子の会			誕生月の幼児の保護者と副園長との懇談		

図２

や意欲に気付くきっかけとなったようであり，実際にこの実践以後には家庭でも同様の手伝いをさせた，という報告が多く寄せられた．この行事だけでなく，以後の保育で取り上げた拭き掃除，おにぎり作り，クッキー作り等でもそれらの活動の家庭への広がりが同様に報告されている．

保護者の中には子供の家事への手伝いの必要や親子の遊びの重要性を感じながらも実際にどうしたらいいのかわからずにいる場合や，きっかけがなくて取り組めずにいる場合も見受けられる．幼稚園が子育てにとって必要とされる具体的な情報を提供することも今後は必要とされるのではないだろうか．

Akita University

写真 1

写真 2

写真 3

＜保護者の目を通した幼稚園生活＞

カレーづくりは全保護者参加の行事と異なり，少人数の保護者の参加であったため，日常の幼稚園生活と変わらぬ自然な幼児の生活が展開され，保護者にとっては普段の幼児の生活や保育者のかかわりを知る機会ともなった．幼稚園生活を保育者から保護者に伝えるだけでなく，こうした機会に参加した保護者を通して他の保護者も幼稚園生活の様子を知ることは，ともすると一方向からだけに偏りがちな幼稚園と家庭との連携では，意義のある機会となると思われる．

2．保育参観（参加）～リース作り（3歳児12月）

(1) 行事の計画

保育参観は従来，学級ごとに保護者が幼児の園生活を参観する機会として設定していたが，全保護者が参観しているという情況の中では，日常の保育と同様の幼児の自然な遊びは展開されないこと，また客観的な参観よりも実際に幼児と共に遊びを体験することによって幼児の幼稚園における生活をよりよく理解することができるのではないか，との意図から，幼児と共に活動する時間を設定している．なお，当日の活動は次の三点をねらいとして計画された．すなわち第一に，幼児の日常の遊びを体験することのできる活動，第二に，保護者自身が楽しむことのできる活動，第三に，親子のかかわりを十分に楽しむことのできる活動である．

(2) 親子での活動

・身近な素材を使ってクリスマスリースを作る．

(3) 活動の実際と家庭との連携についての考察

＜幼稚園の活動への期待＞

夏，保育室横にある藤のつるが長く伸びてきたので，保育者が幼児との遊びの中で少しずつつるを集め，リースの台となる輪を少しずつ作っていった．松ぼっくり，草の実など他の素材も日常の保育や園外保育の際などに集めて，保育室で乾燥させて置いておき，幼児が関心を持てるようにした．

幼児は，始め，保育者がしているということへの興味から一緒に素材集めをしていたが，やがてクリスマスリースを作るということを知って，その活動に期待を持つ幼児も見られるようになった．3歳児にとっては活動への具体的なイメージから目的や見通しをもって活動していくことは難しいが，「クリスマス」という幼児にとって魅力的なことばに何となく期待を膨らませていったように思われる．

一方，一部の保護者は毎日の送迎の際に保育室にある素材を見たり，親子での園外保育（遠足）で保育者と一緒に素材探しをしたりして，12月の行事に期待を抱いていったようであった．

当日はそうして集めた素材だけでなく，数日前から家庭に呼び掛けてそれぞれに集めてもらった材料を持ち寄って製作を楽しむことができた．事前から，この活動に興味をもつ保護者と一緒に素材を探した

Akita University

写真 4

写真 5

り，作り方を相談したりしてきたので，保護者同士での情報交換も見られ，親子でこの日の活動を楽しみにして迎える様子が見られた．

保護者は，幼稚園に対する期待をもって幼児の園生活を見守っている．その期待が幼児の求めている園生活の楽しさと同方向に向かうとき，幼児は安心して活動していくことができると思われる．そのためにも，保護者自身が幼児との活動を十分に楽しむことのできる機会は意義のあることであると言えよう．

＜家庭での遊びへの広がり＞

この日の活動をきっかけとして，家庭でも家族と一緒にリース作りをした，というエピソードを聞くことができた．保育者は当日，3歳児にも無理なく自分の力で製作できる素材を準備していたので，家庭での製作のヒントともなったようである．

中には，園外保育で出掛けた場所に再度素材集めに出掛けた，という家族もいた．

それは，幼稚園での活動は家庭における親子の遊びを啓発していく機会となることを考慮して，行事をはじめとした保育の計画を立てていくことも必要であるという保育者側の意図に合致する結果であると言えよう．それは，幼児の生活は，幼稚園，家庭，と時間や場で区切られたものではなく，その意識は一連の流れの中でつながりをもっているからである．幼稚園での遊びが家庭での幼児の遊び，親子での遊びへと広がっていくことによって，幼児の生活はより生き生きとしたものとなるのではないだろうか．

＜保護者同士のネットワーク＞

素材集めから約3ヵ月間，少しずつこの活動を進めていく中で，手芸の得意な保護者，植物に詳しい保護者，積極的に他の保護者にかかわっていくことのできる保護者などが中心になって集まり，保護者だけのグループで同様の活動や自分たちなりの趣味の活動を始める姿が見られるようになった．保護者がゆとりをもって子供に接していくことができるようになるためには，育児について学ぶだけでなく，自分自身の生活を楽しんでいくことも必要であろう．幼稚園はそのためのネットワーク作りの場としての機能も果たすことができるのではないだろうか．

一方，幼児は友達とかかわる中で，葛藤や挫折も経験しながら成長していくが，そうした過程を保護者が見守り，支えていくことができるようになるためには，保護者を含めた学級集団が，互いを受け容れ認め会う温かなかかわり方をしていかなくてはならないであろう．そのためにも，保護者が他の幼児の良さに触れたり他の保護者とのかかわりを楽しんだりする機会を作っていくことも必要になってくるのではなかろうか．保護者同士のネットワーク作りは本来保護者自身の自発的活動によるべきものであろうが，幼稚園の活動や保育者のかかわりがそのきっかけとしての意味をもつものと思われる．

3．ふようのつどい（5歳児11月）

(1) 活動の計画

「ふようのつどい」は，以前には幼児の発表を保護者が参観する行事として行っていた「学芸会」を，幼児にとっての意味，保護者にとっての意味の両面から見直し，平成元年度から実施している行事である．

なお，今回は以下の三点を計画にあたっての重点

Akita University

とした．すなわち，第一には，幼児の普段の生活の中で，幼児と保育者とが相談しながら一緒に活動をつくっていくこと，第二には，幼児が目的意識を持って取り組んだりみんなと一緒に活動したりする楽しさを味わうことや，見ている人がいる環境の中で自分を表現する喜びを味わうことができる活動を計画すること，第三には，幼児，保護者，保育者とが共に活動し，共感し合える機会とすること，である．

「うたごえひろば」「あそびのひろば」という二部構成で計画したが，その中には，保育者と幼児がつくっていく活動の他に，保護者が企画，運営するコーナーも設定し，行事の一部として組み込むこととした．

なお，「ふようのつどい」の趣旨を略記すれば，表現を楽しむ遊び，季節にちなんだ遊び，人との触れ合いを楽しむ遊び，新しい遊びを通して幼児の遊びを広げ，深める中で，感性と表現を高め，幼児の豊かな心情，意欲，態度を育てる，ということである．また，そのねらいとしては次の二点を設定した．すなわち，第一に，幼児が遊びの楽しさを味わいながら，保護者，保育者，幼児同士の触れ合いを楽しむこと，第二に，保育者と保護者が協力して行事を開催し，行事を通して互いの機能分担について理解しあい，幼稚園と家庭との一層の連携を深める，ということである．

上記の趣旨，ねらいで計画した「ふようのつどい」は幼児と保護者とが一堂に会して歌の交歓を楽しむ「うたごえひろば」と，幼稚園の日常の遊びの中から親子で楽しめるものをコーナーとして設定し，自由に楽しむ「あそびのひろば」との二部構成で行った．

(2) 活動内容

なお，活動内容を箇条書き的に列挙すれば，以下のとおりである．

①うたごえひろば

- 3，4歳児の歌
- 5歳児の歌
- 母親有志のコーラス
- 全幼児の歌
- 全保護者，職員の合唱
- 全員の歌（全職員の合奏による伴奏）

②あそびのひろば

- ドッヂボール
- わらべうたあそび（ことしのぼたん，あぶくたった～集団遊び）
- 伝承遊び（こま，剣玉，おはじき，あやとり，だるまおとし）
- おにごっこ（島おに，ひっこしおに）
- 製作（のりものをつくろう～木工，空き箱製作）
- らくがき（園庭アプローチへの描画）
- おりがみ（保護者企画）
- スライムの国（保護者企画）

(3) 活動の実際と家庭との連携についての考察（うたごえひろばの活動）～5歳児

＜幼児と共に行事を作る過程への理解＞

附属幼稚園の保育では，幼児が自ら展開する遊びを中心とした保育の中に，保育者の援助なしには幼児の発想だけでは生まれない活動や，学級全体，園全体の活動を意図的に計画し，取り入れてきた．みんなで歌を歌う活動も日常の生活の中で大切にとらえ，実践しているものであり，幼児も楽しんで歌う姿が見られる．

5歳児11月になると，幼児なりに目的意識をもって活動したり，見通しをもって活動をすすめたりする姿勢が育ってくる．前年までの経験から「ふようのつどい」に対しての具体的なイメージをもっている5歳児には，自分たちなりの目的をもって歌を覚えようとしたりみんなで歌ってみようとする姿が見られた．また，学級全体で活動する楽しさがわかり，手応えのある活動を求める時期でもあることから，全体で歌を歌う楽しさを味わう様子も見られた．

一方，自由な遊びの中でも楽器や歌の発表会ごっこを進める幼児がおり，そうした遊びの中で「ふようのつどい」で取り上げる予定の歌を自分たちなり

写真6

Akita University

写真 7

写真 9

に楽しんだり，保育者に要求して一緒に楽しもうとする姿が見られた．

保育者はそうした行事に向かう過程にある幼児の活動の様子やエピソードを，毎日の降園時にできるだけ保護者に伝えていくよう心がけた．保護者には自身の先行経験からの行事に対してのイメージがあり，行事に向かう活動を「練習」とか「本番」といったとらえをしている場合も多い．しかし，幼児にとっては行事当日だけではなくその前後の生活もまた同様に楽しく，充実したものであるということや，一緒に行事を作っていく過程が幼児の成長にとって重要であるということを保護者に伝えていくことが，行事を通して幼児の成長を保障するためには必要であろう．また，表面的に整然とした姿や熟達した活動を求めがちな保護者が，行事の意味やねらいを理解できるようになるためにも，行事に向かう幼児の姿を保護者に伝えることは必要であろう．

実際に行事に向かう過程では，保護者はまだ「練習」とか「本番」という意識が強いように思われたが，行事終了後のアンケートでは，「行事前の日々

写真 8

も含めてのふようのつどいだったと気付いた」，「当日に向かう過程こそが意味があった」との感想が寄せられた．したがって，行事実施の意味やねらいへの保護者の理解を得るためには，単に行事当日の活動について知らせるのではなく，前後の活動，日常の保育とのかかわりも考慮していきたい．

＜幼児期ならではの親子のかかわり＞

「うたごえひろば」では，幼児の歌の他に，全保護者による歌，保護者有志による歌，全幼児と全保護者による歌が計画された．保護者も事前に練習日を設けて数回練習していたが，幼児はその様子を見て，「おかあさんたちのうた」をとても楽しみにしていた．行事の日が近付き，幼児も練習の様子を見聞きするうちに保護者の歌を自分たちで歌おうとしたり，家庭や登降園の途中で親子で一緒に歌おうとしたり，家庭で母親に歌ってほしいとせがんだりした，というエピソードが保護者から報告された．

幼児が成長するにつれて母親が子供に歌を歌ってやる機会はほとんどなくなっていた，という保護者もおり，「ふようのつどい」は親子での過ごし方を保護者自身が考える機会ともなったようである．

このように幼児期ならではの親子のかかわり方，幼児が求めるかかわり方を実際の活動を通して保護者自身が気付くことができる場を幼稚園が積極的に提供することも必要ではないだろうか．

＜保護者自身の楽しさ＞

「ふようのつどい」で全保護者の歌，有志によるコーラスを企画した時点では，この活動に興味や意欲を示さない保護者も多かった．こうした実態を見て，この企画を進めることの意味に保育者は疑問を抱いたり，企画を進めるにあたって不安を感じたりもしたが，指導者を招いて実際に数回の練習を重ね

Akita University

写真 10

写真 11

るうちに，保護者自身が練習に参加して歌うことを楽しみにするようになっていった．

専門の指導者を招いたことによって，保護者自身が確実に練習の成果を感じ取ることができたこと，歌う楽しさを知ることができたこと，それを幼児が楽しみにする様子に触れることができたことによって，保護者も「ふようのつどい」に向かう日々を楽しむことができたものと思われる．

幼稚園は同年齢の子供を持つ親同士がかかわることのできる場である．前記の行事の考察でも述べたように，保護者自身が楽しむことのできる活動を通して，子育ても楽しんでいくことができるよう，機会を作ったり，活動への援助をしたりすることも，現在の幼稚園の機能としては大切なことなのではないだろうか．

V　まとめと今後の課題

3つの行事の実践を通して，幼稚園と家庭との連携について考察したが，連携のねらいは特定の行事の中だけで達成されるものでないことは言うまでもない．日常の保育の中での幼児の生活をどのように家庭に伝えていくのか，家庭での課題や保護者の悩みをどのように受けとめ支えていくのか，といった日常の保護者と保育者とのかかわりが基盤となって節目としての行事の意味が生きたものになると考えられる．

また，行事のように目に見えた活動や一斉に行う活動は保護者に理解されやすいが，幼児の自由な遊びやそれに対しての保育者の援助は理解されにくい傾向にある．したがって，日常的なかかわりが行事にどのように生きてくるのか，また，行事をきっかけとして得られたものが日常の保育活動の中でどのように生かされるのかということを明確にしていくことが重要であろう．

以上，幼児を取り巻く課題をとらえ，幼児期にふさわしい生活が実現するための家庭との連携の在り方を行事の実践を通して考察してきた．

幼稚園と家庭との連携を考える際には，ともすると現在の家庭や保護者の問題をとらえて幼稚園が保護者に対して一方的に指導や啓発をしようとしがちである．近年は特に，保護者の養育姿勢や母性についての様々な問題が指摘され，実践の中での課題も少なくないが，課題を抱えながらも個々の保護者はそれぞれに一生懸命子育てをしているのではないだろうか．幼稚園，保育者には今日，幼稚園教育の目的を果たすべく幼児に対しての保育を実践するとともに，保護者の子育てを支援するという役割を果たすことも求められている．支援とは，言うまでもなく本来家庭で行うべき教育の機能を担ったり保護者の要求を受け容れることによって安易に幼稚園理解を得ようとしたりすることではない．

小論では触れることができなかったが，幼稚園と家庭との連携というテーマにとって，行事以外の日常の保育の在り方や，日常的な保護者とのかかわり方，学級通信などの園からの情報提供の在り方なども，不可欠の研究課題である．そのために，保護者と保育者が共に幼児の成長を願い，理解，共感し合うことが幼稚園と家庭との連携の目標であることを念頭におき，さらに実践を振り返りながら，今後の幼稚園と家庭との連携を全体的に考察していくことが筆者の今後の課題である．

参考文献・引用文献

1)　大場幸夫・柴崎正行編，1990：保育内容環境（青木久子：指導上の問題点）．ミネルヴァ書房

Akita University

2) 柏木恵子，1988：幼児期における「自己」の発達．東京大学出版会
3) 柏木恵子，1990：環境としての親の期待．発達 Vol.11，No.41
4) 服部祥子・原田正文，1991：乳幼児の心身発達と環境．名古屋大学出版会
5) 保育研究所，1989：どうみる新幼稚園教育要領 草土文化
6) 文部省，1989：幼稚園教育要領．フレーベル館
7) 文部省，1989：幼稚園教育指導書．フレーベル館
8) 文部省，1989：幼稚園教育指導資料集「家庭との連携を図るために」．世界文化社
9) 文部省，1979：幼稚園教育百年史．ひかりのくに

Summary

It has been increasingly recognized that close cooperation between teachers and families is very important for early childhood education. This article discussed educational meanings of the participation of family members in regular kindergarten events offer good opportunities for adult members of a family to reconsider the care and education of infants, to learn much about the art of rearing, and to find themselves entertained with taking care of their children.

Key Words : Kindergarten, Cooperation with Family, Regular Events

(Received January 20, 1997)